80th Anniversary
Since 1945
SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY

Sapporo Medical University

Integrated Report 2025

北海道公立大学法人 札幌医科大学 統合報告書

創基80周年記念創刊号

Message

北の大地に根差し、世界に羽ばたく

札幌医科大学 Vision for the Next Decade

北海道公立大学法人札幌医科大学　理事長・学長　山下 敏彦

YAMASHITA Toshihiko
札幌医科大学　理事長・学長 1958年、砂川市生まれ。83年札幌医大卒。
整形外科学講座教授、附属病院の病院長などを歴任し、
2022年4月より札幌医科大学 第4代理事長・第12代学長就任。

CONTENTS

学長メッセージ …… 01
新長期ビジョン「札幌医科大学 Vision for the Next Decade」 …… 05
札幌医科大学の価値創造プロセス …… 13
札幌医科大学のさらなる飛躍に期待 ～関係者各位からのメッセージ～ …… 15
札幌医科大学80年の軌跡 …… 17
創基80周年（開学75周年）記念事業 …… 19

活動報告
教育–大学– …… 21
研究–大学– …… 23
診療–附属病院– …… 25
社会・地域連携 …… 27
国際交流 …… 28
北海道各地で活躍する卒業生たち …… 29
数字で見る札幌医科大学 …… 31

運営
組織概要 …… 33
ガバナンス／ハラスメント対策 …… 34

財務
財務情報 …… 35
創基80周年記念事業／クラウドファンディング …… 37

創基80周年、そして100周年に向けて

2025年、本学は、前身である北海道立女子医学専門学校が設立された1945年から数えて80周年を迎えました。1950年に、戦後の新制医科大学の第1号として「札幌医科大学」が開学してからは今年が75周年となります。

日本の戦後の復興と発展の歴史に重なる80年間の本学の歩みを振り返り、先人たちの築いた伝統と功績を再認識するとともに、100周年に向けたさらなる飛躍のためのマイルストーンとすべく、今年、『創基80周年（開学75周年）』記念事業を展開します。

本統合報告書は、その一環として刊行するもので、「創基80周年記念誌」を兼ねます。札幌医科大学の現在と未来へのポテンシャルを凝縮させたものを目指しましたが、その冒頭に、新たに策定した「札幌医科大学Vision for the Next Decade」を掲載させていただきました。

札幌医科大学Vision for the Next Decadeの策定

「札幌医科大学Vision for the Next Decade」は、従来の「札幌医科大学長期ビジョン」を全面的に改訂し、これからの10年さらにその先に向けての本学のあるべき姿や目標を、広く学内外に示すものです。

本ビジョンの作成にあたっては、医学部、保健医療学部、医療人育成センターの若手から中堅の教員に中心的役割を演じていただきました。大学と附属病院の第一線の教育・研究・診療の現場で活躍している人たちの、生きた「目線」や「想い」を反映することを目指しました。

本ビジョンでは、まず札幌医大の5つの「KEY=キ」、すなわち「機動力」「基盤」「希望」「気持ち」「絆」を掲げ、それらの実現のための基本的方策として、SAPMED（サプメド）、すなわち「Streamline：効率化」「Automation：自動化」「Professional Development：専門的成長」「Modern Collaboration：現代的連携」「Engagement＆Encouragement：関与と奨励」「Data-Driven Excellence：データ活用による卓越性」を提示しました。次いで、「教育」「研究」「診療」「国際・社会連携」「ガバナンス」のそれぞれについて具体的なビジョンを列挙しています。

以下に、ビジョンの各項目について、本学の最近のトピックスとも関連して述べさせていただきます。

教　育

地域貢献マインドを持つ次世代を担う医療人材の育成

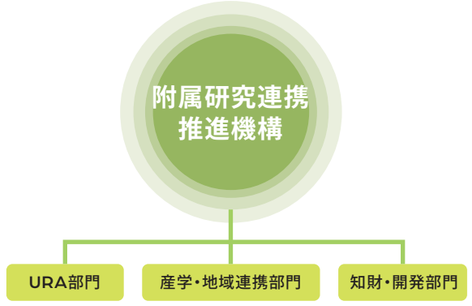
本学の建学の精神には、「医学・医療の攻究と地域医療への貢献」が謳われています。北海道の医療への貢献は、本学に課せられた最も大きな使命であることに間違いありません。ただ、単にいわゆる「地域枠」により、学生の卒業後の進路に縛りをかけるのではなく、入学後の教育・啓発を通して、地域医療に対する興味・モチベーションを培い、自発的な地域貢献への意思と気概を持った人材を育てていくことが肝要であると考えます。本学が従来から取り組んでいる、医学部・保健医療学部合同の「地域医療合同セミナー」は、地域医療マインドと同時に多職種連携（チーム医療）マインドも育むことのできる優れた教育プログラムです。今後はそれに加え、より実践的な地域医療体験や、ICTを用いた地域医療演習などを取り入れた効果的な地域医療教育プログラムを策定していきたいと考えます。

スポーツ医学は、本学がこれまで力を入れてきた医療分野の一つです。2022年に改訂された文部科学省の「医学教育モデル・コア・カリキュラム」では、初めて「スポーツ医学」という文言が明記されました。それを受けて、本学医学部では、2023年に、国公立大学としては初となる『スポーツ医学講座』を設置しました。スポーツ医学に関する卒前・卒後教育を強化するとともに、これまで取り組んできたオリンピック代表選手などトップアスリートの医療サポートの実績を、今後は「総合医学」としてのスポーツ医学の実践や、一般市民の健康増進、ひいては健康寿命の延伸にも応用していきます。

研　究

先端的・独創的研究を推進、成果を産官学連携により地域へ還元

本学はこれまで、がん免疫学領域、再生医学領域をはじめ、多様な分野で先端的基礎・臨床研究を推進してきました。今後のさらなる研究の発展と研究成果の発信を目的として、『附属研究連携推進機構』を設立しました。これは、従来の「附属産学・地域連携センター」と「先端医療研究推進センター」を統合した組織で、全学的な研究推進のほか、産官学連携や知財管理など総合的な研究推進・支援機能を担います。本機構の活動により、今後、競争的研究資金の獲得増加、大型研究プロジェクトへの採択、科学論文の発表増加など、研究力・発信力の強化を目指していきます。



研究成果は、世界に向け発信すると同時に、地域に還元し、地域の発展にも寄与していかねばなりません。『附属研究連携推進機構』を通した産官学連携を強化します。また、地域医療を基盤とした研究活動を展開すべく、ICTを用いたリモートによる地域と大学を有機的に結ぶ研究指導体制を整備します。

診　療

患者本位の優しい医療、そして最高水準の先進医療の展開

本学附属病院では、各診療科において最高水準の医療を推進してきました。がんゲノム医療、手術支援ロボット・内視鏡を用いた低侵襲手術など、多くの分野において先端的医療を展開し、良好な治療成績をあげています。単に医療技術に優れるだけでなく、常に患者さん本位の「優しい医療」を提供する姿勢を保持し、これまで道民の皆様より高い評価をいただいてきました。

COVID-19パンデミックにおいては、1,000名を超える中等症～重症コロナ感染症患者を受け入れるとともに、全道の医療機関や保健所に医療スタッフを派遣し、本道の感染症医療の先頭に立ってきました。この経験を踏まえ、医学部に『感染学講座　感染症学分野』を開設するとともに、『感染症医療教育・支援センター』を機構化し、感染症医療に関わる教育・人材育成に努めていきます。

「医療DX」は本学が最も力を入れているテーマの一つです。富士通株式会社と共同して開発した『ポータブルカルテ™』は、モバイル端末を用いて、患者さんと大学病院の双方向性の情報共有を可能とする全国初のシステムです。広大な北海道においては、今後その有用性が大いに発揮されるものと思います。また、ICTを用いた遠隔医療システムは、すでに多くの診療科において導入・活用されており、こちらも北海道の気候や地理的事情を背景に、今後ますます発展するものと思われます。

附属病院の収支改善、経営の健全化は極めて重大かつ困難を伴う課題です。この度、新たに、附属病院に『病院経営戦略部』を設置し、教員、医療職員、事務職員が一体となって経営の改善に向けて取り組む仕組みを構築しました。医療DXを推進するとともに、病院内外の情報収集と状況分析を精緻に進めていきます。また、検診医療や医療ツーリズムへの参入など、積極的な経営戦略を進めてまいります。

国際・社会連携

DXの基盤を整備し、積極的に国際連携・地域貢献へコミット

DXの推進は、大学や附属病院の労働生産性の向上、競争力強化、経営健全化、さらには社会との連携や地域貢献の上にも、極めて重要な課題であり、時代の要請でもあります。そこで本学では、『DX推進室』を設置し、医療DX、教育・研究DX、そして事務業務DXなど全学的なDXを統括します。DXに関するシステム構築やデータ収集などにおける司令塔的役割が期待されます。

本学は、米国、カナダ、韓国、中国、フィンランド、台湾の9つの大学・団体と国際交流協定を締結しています。学生や研究者の相互訪問・留学を通して、国際感覚を有する医療人の育成を目指します。現在、さらなる交流校の拡大に向けて取り組み中です。また、海外で活躍する本学卒業生による講演会や国際シンポジウムの開催などを通して、学生や研修医の国際志向や国際感覚の向上を図っていきます。

ガバナンス

全ての学生・教職員が存分に力を発揮できる明るい大学に

昨年、本学では一部の教員によるパワーハラスメント、アカデミックハラスメントの事案が発生し、本学の信頼が著しく損なわれたことは極めて遺憾に存じます。この事案を受け、「ハラスメントをしない・させない・許さない」という理事長メッセージを発信したほか、研修会等を通して教職員のハラスメント防止に向けた意識向上を図っているところです。

ガバナンスの発揮のためには、まずは大学の現状を把握し、長所や欠点・課題などを理解することが前提となります。そのために重要なのがIR（institutional research）です。本学では、これまでの医療人育成センター統合IR部門を発展的に改組し、学長直下の『統合IRセンター』として機構化しました。今後は、教学のみならず、研究分野や法人・病院経営にも資するデータやエビデンスの収集・分析を本格化します。IRをバックグラウンドに、より的確かつ効果的なガバナンスを実現していきたいと考えています。

世界に羽ばたく札医のつばさ

本学では新キャンパスの完成を記念して、新しい大学のロゴマーク（コミュニケーションマーク）を制定しました。マークのコンセプトは『世界に羽ばたく札医のつばさ』です。札幌医科大学のイニシャルSをモチーフに、世界に、未来に向かって飛翔する翼やプロペラをイメージしました。マークの青は北海道の雄大な空と「医療人としての使命感」、えんじ色は北の大地と「生命力」を表しています。このマークが表現するような、北の大地に根差し、大空へ、世界へと羽ばたく医療人を育て、輩出していくことが私たちの使命です。

この度策定した、「札幌医科大学Vision for the Next Decade」は、「進取の精神と自由闊達な気風」、「医学・医療の攻究と地域医療への貢献」という建学の精神を土台として、本学がさらなる高みを目指すための道標となるものです。札幌医科大学の未来が希望に満ちたものであるために、そしてそこで学び、働く者たちが世界に向けて飛躍するために、本ビジョンが先導役となり、本学を力強く導いてくれることを願っています。

北海道公立大学法人 札幌医科大学

Vision for the Next Decade

札幌医科大学の新長期ビジョン「札幌医科大学 Vision for the Next Decade」は、
次の3つから構成されています。

札幌医大の5つの「KEY=キ」

「機動力」「基盤」「希望」「気持ち」「絆」

SAPMED

「Streamline：効率化」
「Automation：自動化」
「Professional Development：専門的成長」
「Modern Collaboration：現代的連携」
「Engagement & Encouragement：関与と奨励」
「Data-Driven Excellence：データ活用による卓越性」

ビジョン

「教育」「研究」「診療」「国際・社会連携」「ガバナンス」

本ビジョンの作成にあたっては、若手から中堅の教員が中心となり、
大学と附属病院の第一線の教育・研究・診療の現場で活躍している人たちの、
生きた「目線」や「想い」を反映することを目指しています。

札幌医大の5つの「KEY=キ」

「機動力」「基盤」「希望」「気持ち」「絆」

01 KIDORYOKU 機動力を持った地域医療の振興

地域のニーズに迅速に対応できる医療体制を整備し、住民の健康を支えます。移動診療や遠隔医療を活用し、医療アクセスの難しい地域にも高品質な医療サービスを提供します。

02 KIBAN 基盤を支える医療人材の育成

次世代の医療を担う人材を育成し、持続可能な医療システムを構築します。高度な専門知識と倫理観を備えた医療従事者を輩出します。

03 KIBOU 希望をつなぐ基礎医学・臨床研究の推進

最先端の基礎医学研究を基盤とし、臨床研究やトランスレーショナルリサーチを推進します。新たな治療法や治療薬の開発に取り組むとともに、難病や未解決の医療課題に挑戦します。研究成果を社会実装し、社会に希望をもたらす科学の力を追求します。

04 KIMOCHI 気持ちに寄り添う全人的医療の展開

患者さんの心と身体の両面に配慮したケアを行い、信頼関係を築きます。医療チームが一丸となり、患者さんの生活背景や価値観を尊重し、全人的医療の実現を支える基礎研究にも注力します。ストレスや疾患メカニズムの解明を通じ、患者中心の医療モデルを科学的に裏付ける取り組みを進めます。

05 KIZUNA 絆を深める医療連携の強化

他の医療機関や福祉施設との連携を強化し、包括的なケア体制を構築します。地域の医療ネットワークを活用し、情報共有と協力を促進します。

5つの「KEY=キ」

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY

実現のための基本的方策 SAPMED

S treamline 効率化

デジタル革新で業務効率を向上

紙媒体の使用を大幅削減し、DXを積極的に推進します。オンライン文書管理システムを導入し、教育・研究・診療及び事務管理を迅速かつ効率的に行える環境を整備します。

A utomation 自動化

業務プロセスの最適化で迅速対応

業務フローを見直し、徹底的に無駄を排除します。押印をなくし電子署名を導入することで、診療記録、研究データ管理、教育運営の意思決定を大幅にスピードアップします。

P rofessional Development 専門的成長

人材育成で組織力を強化

継続的な教育研修を通じて、最新の医療技術やICTスキルを持つ人材を育成します。次世代の法人職員の活力を引き出し、組織の新陳代謝を促進します。道からの派遣職員の割合を段階的に減らし、教職協働のもと人材流動性を高めることで、事務職員全体の能力を底上げし、教育・研究・診療を支える強固な基盤を築きます。

M odern Collaboration 現代的連携

コミュニケーション強化で連携を促進

オンラインツールやプラットフォームを活用し、診療チーム、教育機関、研究グループ間の情報共有を円滑化します。部門間の連携を深めるだけでなく、国際的なパートナーシップを構築することで、全体のパフォーマンス向上を図ります。

E ngagement & Encouragement 関与と奨励

柔軟な働き方で生産性と満足度を向上

フレックスタイム制やテレワークを導入し、職員のワークライフバランスを改善します。さらに、職員エンゲージメントを高める施策を打出し、組織コミットメントとモチベーション向上を図ることで、職員が意欲的に教育・研究・診療に取り組める環境を整備します。

D ata-Driven Excellence データ活用による卓越性

データを活用した組織戦略と業務改善

教育・研究・診療のデータを活用し、自己点検による恒常的な業務改善を推進します。データドリブンな意思決定により、効率的かつ持続可能な運営を目指します。

Education

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY

教育ビジョン

私たちの教育ビジョンは、5つの柱で次世代医療を担う人材を育成します。「Empowerment」で個性を活かした教育と医療DX教育を推進し、「Ethical」で高い倫理観と使命感を備え、「Engagement」で未来志向の地域医療リーダーを輩出します。「Enhancement」で多職種連携を強化し、協調力を育みながら「Exploration」により社会課題対応型教育を推進し、地域と世界に貢献します。

E mpowerment 能力強化

【多様な学生の個性を活かした教育と医療DX推進】

学生一人ひとりの特性や強みを最大限に引き出す個別カリキュラムを提供し、多角的な視点を持つ医療者・研究者を育成します。AIやビッグデータを活用した医療DXを推進する人材育成を強化し、遠隔医療やロボティクス技術にも対応できる教育環境を整備します。

E thical 倫理

【倫理観と使命感を備えた未来志向の医療人の育成】

医療倫理の教育を深化させ、医療環境の変化に適応する柔軟性をもち、多様な価値観を尊重して実践する能力を養います。国際的な基準に基づくカリキュラムや海外大学との共同プログラムを導入し、グローバル視点と異文化対応力を備えた人材の育成を目指します。

E ngagement 関与・参加

【次世代学習環境の創出と地域医療リーダーの育成】

オンライン教育と対面教育を融合させ、地域や世界を結ぶ教育プログラムを開発します。北海道特有の医療課題に対応できるリーダー育成のため、寒冷地特有の疾患や高齢化社会、僻地医療や災害医療等の実践的教育を充実させます。

E nhancement 強化

【チーム医療の力を育む多職種連携】

チーム医療や多職種連携を強化する教育を進め、協働力と実践力を兼ね備えた人材を育成します。シミュレーション教育や地域医療体験を通じ、現場で直面する課題に積極的に取り組み、新たな医療モデルの構築や改善に貢献できる能力を養います。

E xploration 探究

【学際的探究心と社会課題解決能力の育成】

MD-PhDプログラム等を通し、早期からの研究志向性を養うとともに学外研究者との連携により、多様な研究機会を提供します。高齢化社会や感染症などの課題に対応するプロジェクト型学習を推進し、学生が課題発見から解決策提案までを体験できる環境を整えます。

Research

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY

研究ビジョン

私たちの研究ビジョンは、大学附属病院を有する北海道の医療系総合大学の特性を活かし、「Regional Focus」で北海道の医療課題を解決し、「Research Network」で国際共同研究を推進します。「Revitalization」で多職種・他分野との共創を実現し、「Resilience」では多様な研究者の環境を整備しながら、「Revolutionary Technology」で医療DXのイノベーションを実現します。

R egional Focus 地域特化

【地域特化型医療研究とサステナブルなシステム構築】

北海道の地域特性に基づき、寒冷地特有の疾患や高齢化社会、僻地医療の課題に対応する研究を深化させます。自治体や地域医療機関、企業等と連携して医療資源の効率的活用やエコフレンドリーな技術開発を推進し、持続可能な医療システムの構築を進めます。

R esearch Network 研究ネットワーク

【グローバル研究ネットワークの構築と革新的人材の活躍支援】

国際的な研究機関や大学との連携を強化し、グローバルな医療課題に対応する研究を展開します。多様なバックグラウンドを持つ人材の発掘と支援に注力し、特に女性や若手研究者が研究に注力できるよう、キャリア支援や環境の整備を進めます。

R evitalization 活性化

【多職種・他分野との共創の活性化】

医療系総合大学の特色を活かして多職種や他分野の共同研究を推進し、基礎研究と臨床応用を繋げる研究体制を構築します。工学、理学、社会学等の異なる学術分野との連携や産官学連携を強化して革新的な知見の共創を活性化させます。研究人材の育成や知財活用を推進します。

R esilience 回復力

【次世代の科学を牽引する研究者の育成と支援】

研究者が変化や困難に直面しても回復力を発揮できるよう、包括的な支援体制を強化します。セミナーやメンター制度、内外の研究機関との交流を通じ、自己成長や課題解決力を高める機会を提供し、多様な視点から将来の医学・保健医療学を支える研究者を育成します。

R evolutionary Technology 革新的技術

【データサイエンス・DXによる医療研究の革新と支援強化】

AI、ビッグデータ、IoTを活用し、医療DXを推進する研究を展開します。医療データ解析による新たな診断・治療法の開発や遠隔医療システムの構築を目指し、研究支援体制の強化によりデータサイエンス教育の専門家を育成します。

Treatment

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY

診療ビジョン

私たちの診療ビジョンは、「Trust」を基盤に、透明性のあるコミュニケーションと適切な施設整備を通じて未来志向の医療を推進します。「Talent」の育成、「Total Care」による生涯支援、「Transformation」を通じた教育・研究・診療の革新、「Teamwork」を活かした協力体制により、北海道の地域医療の質向上と持続可能な医療体制を目指します。

T rust 信頼

【信頼される医療機関の構築】

透明性のあるコミュニケーションを通じ、患者と職員から信頼される環境を提供します。AIや遠隔医療を活用し、地域全体の健康意識を向上させます。すべての職員が心地よく働ける環境を整え、医療の質向上や地域社会のニーズに応じて、必要な設備を適宜整備します。

T alent 人材

【次世代医療人材の育成】

教育と指導を重視し、柔軟な思考と迅速な対応力を持つ専門家を育てます。研究支援環境を充実させ、医療課題の解決に取り組むアントレプレナーシップを育成し、ジェンダーギャップの解消にも取り組みます。

T otal Care 包括的ケア

【生涯を支える包括的医療】

疾病予防からリハビリテーションまで患者のQOL向上を目指します。オーダーメイド医療と多職種間の連携により、世代を問わず適切な医療を提供し、地域全体の健康維持を支援します。

T ransformation 変革

【医療の質の抜本的向上】

教育・研究・診療の革新により、地域社会の変化に柔軟に対応します。災害時にも安定した医療を提供する緊急対応体制を整備し、未来志向の医療エコシステムを北海道に構築します。附属病院の戦略的経営により、安定した病院収支を実現します。

T eamwork チームワーク

【協働を基盤とした医療推進】

職種を超えたチームワークで患者中心の医療を実現します。医療従事者間の協力体制を強化し、情報共有と効率的なケアで地域医療の質向上を図ります。

International & Inspiration

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY

国際・社会連携ビジョン

私たちの国際・社会連携ビジョンは、「Innovation」によるDXを活用した地域医療・地域保健の最適化、「Integration」によるグローバルネットワークの拡大を通じた研究者・医療人の育成、「Inclusivity」を重視した国際都市札幌での最先端医療の提供を推進し、ステークホルダーとの共創からの「Inspiration」を大事にした「Impactful Engagement」を目指します。これらを通じて、地域住民と世界中から訪れる人々の健康とウェルビーイングに貢献します。

I nnovation 革新

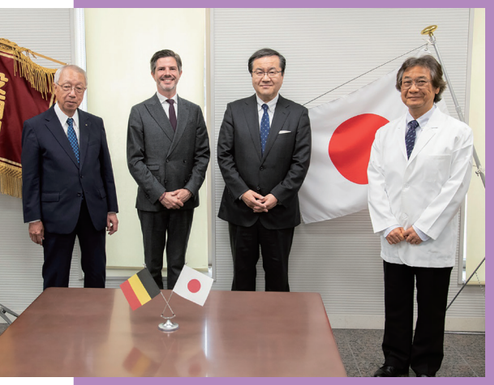
【地域医療・地域保健のDXイノベーション拠点】

地域ステークホルダーと連携し、AIやIoTを活用した効率的かつ効果的な地域医療・地域保健の新たな形を共創します。医療資源へのアクセスを最適化し、持続可能な社会の実現に向けたイノベーションを推進します。

I ntegration 統合

【グローバルネットワークの拡充による研究者・医療人の育成】

海外の大学・医療機関との連携協定など多様なグローバルネットワークを拡充していきます。これらを基盤に、国際的素養を備え、世界に情報発信できる研究者・医療人を育成するための環境を整備します。



I nclusivity 包摂性

**【国際都市札幌における
グローバルスタンダードに基づく最先端医療の提供】**

インクルーシブな社会を目指し、国際都市札幌でグローバルスタンダードに基づく最先端医療技術とサービスを提供し、地域住民だけでなく、世界中から訪れる人々の健康とウェルビーイングに貢献します。

I nspiration 着想

【地域特性を活かした革新的医療連携の実現】

地域住民や行政と協働し、北海道の特性を活かした新たな医療連携モデルを創出します。
遠隔医療や災害対応を含む持続可能な仕組みを構築し、地域全体の健康と安全を支えます。

I mpactful Engagement 効果的な関与

【地域と国際社会に対する持続可能で具体的な貢献の推進】

地域住民の生活や健康に密接に関与し、地域内外の健康課題に対して実効性の高い解決策を提供します。災害時や緊急事態における即応体制を強化し、地域医療や国際社会へのインパクトを持つ活動を展開します。

Governance

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY

ガバナンスビジョン

私たちのガバナンスビジョンは、「Governance」を通じて透明性のある意思決定を実現し、「Gratification」の向上を目指した働きやすい職場環境を構築します。「Growth」を支える資源配分の最適化、「Globalization」によるICT活用と業務効率化を推進。「Groundwork」として財務・人材基盤の強化と魅力発信を進め、持続可能な成長を目指します。

G overnance ガバナンス

【道民の信頼を得るガバナンス体制の確立】

透明性のある意思決定プロセスを確立し、学生参加型のガバナンスを推進します。教育の質を向上させるとともに、地域社会からの信頼を得る体制を築きます。

G ratification 満足感

【働きがいのある職場環境の改善】

教職員の「働き方改革」を推進し、全学的なコンプライアンスを強化します。ダイバーシティ&インクルージョンを推進し、多様な人材が活躍できる環境と組織を構築し、やりがいのある環境を整えます。

G rowth 成長

【限りある資源を有効活用した成長の実現】

「選択と集中」による資源配分の重点化を行い、多職種連携を通じて総合的な医療提供を促進します。大学法人としての強みを活かし、効率的かつ効果的な成長を実現します。

G lobalization グローバル化

【ICT利活用と業務効率化の徹底】

ネットワーク基盤の強化や業務の簡素化を推進します。AIやデータ活用による業務改善を通じて、法人全体の効率性を高め、グローバルな視点での発展を目指します。

G roundwork 基盤

【財務・人材基盤の強化と法人の魅力発信】

外部資金の獲得と持続可能な人材育成で安定した基盤を確立します。SNSやメディアを活用した広報を戦略的に展開し、法人の魅力と強みを発信します。

札幌医科大学の価値創造プロセス

札幌医科大学の強み

経営の5要素

- 人的資本
- 知的資本
- 財務資本
- 社会関係資本
- フィールド

フィールドの強み

累計卒業生数：
9,115人

道内医療機関への医師派遣数：
2,145件、455施設、
派遣要請に対する応諾率97.3%

附属病院：
32診療科、844床

強みを表すデータ

特許権保有件数のうち
実施許諾中の特許件数の割合
59.5%　3年連続全国1位

THE世界大学ランキング日本版2023
教育リソース分野　道内1位

災害時における医療の確保及び
搬送体制の整備を図る
基幹災害拠点病院
道内1施設のみ

Vision for the Next Decade

新長期ビジョン

SAPMED

5つの「KEY＝キ」
実現のための
基本的方策

S
Streamline
（効率化）
デジタル革新で
業務効率を向上

A
Automation
（自動化）
業務プロセスの
最適化で迅速対応

P
Professional Development
（専門的成長）
人材育成で
組織力を強化

M
Modern Collaboration
（現代的連携）
コミュニケーション
強化で連携を
促進

E
Engagement & Encouragement
（関与と奨励）
柔軟な働き方で
生産性と満足度を
向上

D
Data-Driven Excellence
（データ活用による卓越性）
データを活用した
組織戦略と業務改善

札幌医大の
5つの「KEY=キ」

機動力

基盤

希望

気持ち

絆

INPUT

OUTPUT

- DXの推進・実現
- 多職種連携による協力的な医療
- 次世代の医療リーダーの育成
- アクセスの容易さ
- 予防医療の推進
- 医療の卓越性
- 持続可能性

グローバルに活躍する
人材を育成

教育（Education）

- Empowerment（能力強化）
- Ethical（倫理）
- Engagement（関与・参加）
- Enhancement（強化）
- Exploration（探究）

研究（Research）

- Regional Focus（地域特化）
- Research Network（研究ネットワーク）
- Revitalization（活性化）
- Resilience（回復力）
- Revolutionary Technology（革新的技術）

診療（Treatment）

- Trust（信頼）
- Talent（人材）
- Total Care（包括的ケア）
- Transformation（変革）
- Teamwork（チームワーク）

国際・社会連携（International & Inspiration）

- Innovation（革新）
- Integration（統合）
- Inclusivity（包摂性）
- Inspiration（着想）
- Impactful Engagement（効果的な関与）

ガバナンス（Governance）

- Governance（ガバナンス）
- Gratification（満足感）
- Growth（成長）
- Globalization（グローバル化）
- Groundwork（基盤）

STAKEHOLDER COMMUNICATION

ステークホルダーコミュニケーション

札幌医科大学のさらなる飛躍に期待

北海道知事、北海道医師会会長並びに関係者各位からのメッセージをご紹介いたします。

北海道知事

鈴木 直道

札幌医科大学創基80周年に寄せて

札幌医科大学が、創基80周年という節目を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

昭和20年に前身の北海道立女子医学専門学校が設立され、昭和25年に戦後の新制医科大学の第1号として開学した札幌医科大学は、当時、保健医療体制が国内で最も厳しい状況にあった本道において、地域医療に貢献する医師を育成し、道の衛生行政の推進に大きく寄与されました。昭和58年には、保健医療学部の前身の衛生短期大学部が併設され、高齢化に伴う医療ニーズの変化を見据え、医療・福祉を支える人材の育成にも尽力してこられ、本道唯一の公立医療系総合大学として、多くの医療人を輩出しています。

また、昭和31年には大学院医学研究科を設置するなど、研究活動や専門医療を推進され、がん治療や再生医療などの分野において先端医学研究をけん引されており、さらに附属病院は、道内唯一の高度救命救急センターとして、DMATの派遣など災害医療の中核を担い、令和2年に全国に先行して始まった新型コロナウイルス感染症との戦いにおいては多くの患者を受け入れていただきました。

開学創生期から受け継がれる「進取の精神と自由闊達な気風」「医学・医療の攻究と地域医療への貢献」という建学の精神の下、本道における医療の発展と道民の健康増進のため尽力されてきた、山下理事長をはじめ歴代の理事長、学長、並びに関係の皆様に、深く敬意を表します。

道民の皆様の命と健康を守ることは、道政の最優先課題です。誰もが住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができるよう、道では今後とも、札幌医科大学との緊密な連携の下、持続可能な医療提供体制を確保し、本道の保健・医療・福祉の充実に努めてまいりますので、引き続き、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、札幌医科大学のますますのご発展並びに、関係の皆様のご健勝とご活躍を心から祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

北海道医師会
会長

松家 治道

ともに、より良い地域医療の実現を

札幌医科大学が創基80周年（開学75周年）を迎えられたことを、心よりお祝い申し上げます。

貴学はこれまで、北海道の医療を支える多くの優れた医師・医療従事者を育成し、地域医療の発展に多大な貢献をされてきました。その卓越した教育・研究・診療の実績は、私たち北海道医師会にとっても誇りであり、心強い支えとなっています。

現在、医療を取り巻く環境は大きく変化し、北海道は全国を上回るスピードで人口減少と少子高齢化が進んでおりますが、地域医療の充実や医療の質の向上が求められています。このような難問に対し、札幌医科大学がこれからも先進的な医療を推進し、社会に貢献されることを期待しています。

北海道医師会は、貴学とともに北海道の医療を支え、より良い地域医療の実現に向けて歩み続ける所存です。貴学の今後のさらなる発展を祈念いたします。

札幌医科大学医学部同窓会
会長

西里 卓次

頼りになる母校としてさらなる発展を

創基80周年を迎えた、札幌医科大学医学部は、これまで6,000人以上の優秀な医師を輩出してきました。私たち卒業生、同窓会会員の多くはそれぞれの立場で北海道の地域医療に力を尽くしています。また札幌医大は、医療人の育成に加えて地域医療との連携、支援を担っており、北海道の医療における貢献は質、量ともに極めて大きいと考えます。私たち同窓生が、道民の皆様に寄り添って働けるのも大学の支えがあってこそです。建学の精神にある「医学・医療の攻究と地域医療への貢献」の継続のためにも、今後も頼りになる母校として臨床、教育とともに研究面でもさらなる発展を心から祈念申し上げます。

札幌医科大学後援会
会長

秦 史壯

地域医療および教育・研究の向上に向けて邁進を

札幌医科大学は、戦時中の医師不足の解消を目的として、1945年に北海道立女子医学専門学校として設立され、本年、創基80周年を迎えました。1950年に新制医科大学として開学し、1993年には看護学科、理学療法学科、作業療法学科を擁する、全国初の保健医療学部が開設されました。この由緒ある大学で良き医療者を輩出するために、後援会は地域実習の交通・宿泊費、学生海外研修費や国家試験対策費の助成などに対し、保護者の皆様や大学と連携のうえ最大限の協力と支援を行っております。

本学が、地域医療および教育・研究の向上に向けて邁進できるよう、後援会としても引き続き支援の輪を広げてまいります。今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

札幌医科大学保健医療学部同窓会
会長

越後 歩

80周年の節目を迎えて

札幌医科大学が創基80周年という節目を迎え、保健医療学部同窓会会長として大変嬉しく思います。本学はこれまで多くの優れた医療専門職を輩出し、教育・研究において確かな実績を積み重ねてきました。卒業生にとっては、人生の基盤を築いたかけがえのない母校であり、その伝統と精神は今も後輩たちに受け継がれています。今後も時代の変化に柔軟に対応しつつ、理念と志を次世代へとつないでいかれることを願います。

同窓会は今後も母校との絆を深め、卒業生と在学生、教職員とのつながりを強化する活動に取り組んでまいります。最後に、札幌医科大学のさらなる発展と関係者の皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

札幌医科大学
理事長顧問

中川 俊男

アカデミアとしてさらなる飛躍を

母校で学びを得た頃は、まだ「若い」大学であり、自由闊達な気風のもとで、何にでも体当たりでチャレンジすることができました。わたしが2020年に日本医師会長に就任したとき、日本を新型コロナウイルス感染症のパンデミックが襲っており、前例のないことを一瞬で判断し、ありとあらゆる対策を講じなければならず、そのときに求められた決断力や応用力は、母校の校風に養われたと実感しています。

時の流れは驚くほど速く、長い歴史の中で道内の地域医療へ貢献しつづけ、新型コロナのときには北海道と札幌医科大学との見事な連携で、感染収束に向けた重要な役割を果たしました。さらに、母校の研究開発力はいまや世界を凌駕し、世界初の脊髄損傷の再生医療治療薬「ステミラック®注」の開発上市や新たな乳がんの治療薬として販売が認可された「ダトロウェイ®」などは特筆に値します。アカデミアとしてのさらなる飛躍を期待しております。

札幌医科大学80年の軌跡

札幌医科大学は、1945（昭和20）年に設立された北海道立女子医学専門学校を前身に、1950年に戦後初の新制医科大学として開学しました。
同年6月25日の開学式で大野精七初代学長が述べた「本学の使命と建学の精神は医学の進歩発展に寄与すること」は、現在まで脈々と息づき、最高レベルの教育・診療・研究を推進するべく、たゆまぬ歩みを続けています。

大野精七初代学長

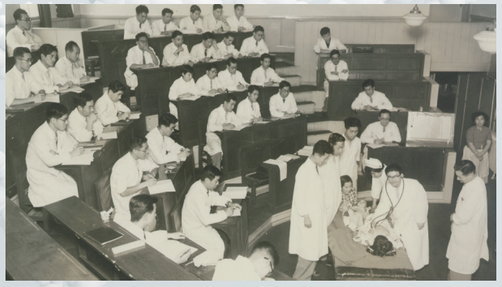
開学当初の大学校舎

- **1945** 本学の前身「北海道立女子医学専門学校」開校
- **1950** 札幌医科大学開学
- **1955** 公立大学初のがん研究施設としてがん研究所開設
- **1956** 大学院医学研究科を開設 附属図書館竣工
- **1960** 開学10周年（創基15周年）記念式挙行
- **1964** 附属病院南棟、中央棟竣工
- **1975** 開学25周年（創基30周年）記念式挙行
- **1977** フィンランドパウロ財団と本学初の大学交流協定締結
- **1982** 動物実験施設部開設
- **1983** 札幌医科大学衛生短期大学部開校
- **1993** 保健医療学部を開設、医療系総合大学へ
- **1998** 大学院保健医療学研究科開設
- **1999** 基礎医学研究棟竣工
- **2000** 開学50周年（創基55周年）記念式挙行
- **2002** 高度救命救急センター開設
- **2007** 地方独立行政法人化し北海道公立大学法人札幌医科大学へ
- **2008** 医療人育成センター開設 大学院医学研究科修士課程開設
- **2010** 開学60周年（創基65周年）記念式挙行
- **2012** 助産学専攻科（現専攻科助産学専攻）開設
- **2013** 保健医療学部開設20周年記念式挙行
- **2020** 専攻科公衆衛生看護学専攻開設
- **2022** 新キャンパス完成
- **2023** 保健医療学部開設30周年記念式挙行 国公立大初の「スポーツ医学講座」開設
- **2025** 創基80周年（開学75周年）を迎える

Vision for the Next Decade

80th Anniversary Since 1945 SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY

1945年夏、仮校舎にて
北海道立女子医学専門学校1期生


札幌医科大学開学当初の階段講堂での臨床講義

沿革のサイトはこちら
https://web.sapmed.ac.jp/jp/summary/03bqho0000000ct8.html

近年のトピックス

1 世界初、脊髄損傷の再生医療
2018年12月、世界初となる脊髄損傷の治療に用いる再生医療等製品が厚生労働省に条件及び期限付承認を取得。2019年5月から再生医療等製品「ステミラック®注」として脊髄損傷に対する治療を開始。

1

2 基幹災害拠点病院としての対応
道内唯一の「基幹災害拠点病院」として、2018年9月に発生した北海道胆振東部地震においては「北海道DMAT活動本部」を立ち上げ、全道DMATの司令塔として、全道各地域で医療支援活動を展開。

2

3 新型コロナウイルスへの対応
感染症の流行初期から病院の総力を挙げて対応。のべ55,385件の検査や117名の重症人工呼吸器患者を治療するとともに、医療機関との連携システムを構築し、迅速な入院につなげた（2020年～2023年実績）。

3

4 未来医療の実現に向けて
2025年1月、北日本初となる甲状腺に対するロボット支援手術を実施するなど各診療科において最高水準の医療を推進。「医療DX」にも力を入れ、次世代スマート診療「ポータブルカルテ™」を国内で初めて運用開始。

札幌医科大学
創基80周年（開学75周年）記念事業

創基80周年という節目に本学の決意を新たにするとともに、
ビジョンに基づく取り組みを推進するため、様々な記念事業を実施いたしました。

80th Anniversary Since 1945 SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY

札幌医科大学 創基80周年（開学75周年）記念 講演会・シンポジウム

主催：札幌医科大学　**2025.6.28（土）**

●記念講演
（式典会場・オンライン配信）

「トップスポーツを支える
医科学の現状と課題
―札幌医科大学スポーツ医学講座開設に寄せて―」

筑波大学体育系 教授
山口 香氏

1988年ソウル五輪女子柔道銅メダリスト（講道館女子7段）。2021年まで日本オリンピック委員会理事を10年間務める。
現在は、筑波大学で教鞭をとる傍ら、日本サッカー協会常務理事、企業の外部取締役など、スポーツの普及発展、教育、多様性の推進等に努めている。

●シンポジウム
（式典会場・オンライン配信）

シンポジウムテーマ
「世界に羽ばたく
札医のつばさ」

講演「医療従事者の仕事を変える新たな潮流：変化する医療環境とキャリアの未来」

米国　カリフォルニア大学サンフランシスコ校
教授
長尾 正人氏（札幌医科大学医学部1982年卒）

講演「"世界一幸せな国"から考える看護の創造性」

フィンランド　タンペレ大学
博士課程
久末 智実氏（札幌医科大学衛生短期大学部 看護学科1995年卒）

講演「黎明期から成熟期に至る移植医療を現場最前線での経験から」

米国　南カリフォルニア大学
教授
岩城 裕一氏（札幌医科大学医学部1975年卒）

ビデオメッセージ

国境なき医師団日本会長
中嶋 優子氏
（札幌医科大学医学部2001年卒）

HTB・札幌医科大学 包括連携協定事業 札幌医科大学創基80周年（開学75周年）記念 国際医療セミナー（会場・一般向けオンデマンド配信）

主催：北海道テレビ・札幌医科大学　**2025.5.7（水）**

「札幌医大が育てた
国境なき医師団日本会長の話！」

札幌医科大学卒業生・救急医の中嶋優子氏が、医師として、国境なき医師団日本会長として、なぜ前を向き挑戦しているのか、世界の紛争・貧困地域での医療について本学在学生や教職員に向けて語りました。

国境なき医師団日本会長
中嶋 優子氏
（札幌医科大学医学部2001年卒）
『日経WOMAN』の
「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2025」受賞

十勝毎日新聞社・札幌医科大学 包括連携協定事業 札幌医科大学創基80周年（開学75周年）記念 かちまい・札幌医大 医療セミナー（会場・北海道ホテル［帯広市］）

主催：十勝毎日新聞社・札幌医科大学　**2025.6.13（金）**

「人生100年時代を健やかに」

第1部：講演「北海道の元気のために：札幌医大の最新医療」

「健康寿命」を延ばすために、本学で展開しているスポーツ医学や再生医療、医療DXなど最新の医療・医学研究の成果を道民の健康維持・増進に応用するための取り組みの一端を紹介しました。

札幌医科大学
理事長・学長
山下 敏彦

第2部

講演「スポーツ医学が導く健やかで元気なライフパフォーマンス」

スポーツ医学の知見を日常に生かすポイントと、すぐに実践できる身体コンディショニング方法を紹介。人生100年時代をアクティブに楽しむヒントを伝えました。

札幌医科大学
保健医療学部
学部長
片寄 正樹

ストレッチ指導「良い姿勢の重要性 あなたの背中丸まっていないですか？」

座ってできる「背骨曲げ伸ばし運動」「背骨回復ストレッチ」を通じて、姿勢改善のコツを指導し、来場者と一緒に実践しました。

札幌医科大学
保健医療学部
理学療法学
第二講座
講師
戸田 創

活動報告
Performance

21 教育–大学–
23 研究–大学–
25 診療–附属病院–
27 社会・地域連携
28 国際交流
29 北海道各地で活躍する卒業生たち
31 数字で見る札幌医科大学

次世代の医療人教育と先端的医療・研究を推進

自由な学修環境のもと、実践力と人間性を育む独自のプログラム

本学は、医学部と保健医療学部の2学部4学科からなる、北海道唯一の公立医療系総合大学です。学生一人ひとりの個性や能力を尊重しつつ、実践力を身に付けるきめ細やかな少人数制教育を展開。独自のプログラムや新しい教育システムを導入し、地域と世界で活躍する医療人育成を目指して卒前・卒後の一貫教育に取り組んでいます。

医学部

●医学科 ●附属研究所
●教育研究機器センター
●動物実験施設
●カダバーセンター

多様化する医学・医療の発展に対応できる基本的臨床能力、技術を備えた人間性豊かな医師・研究者を育成

保健医療学部

●看護学科
●理学療法学科
●作業療法学科

全国初の保健医療学部として30年以上にわたり、人々の命と健康を守り生活を支えるスペシャリストを養成

医療人育成センター

●入試・高大連携部門
●教養教育研究部門
●教育開発研究部門
●応用情報科学部門

本学における医学・保健医療学教育のシンクタンクとして指導的役割を担い、地域医療に貢献できる医療人を育成

大学院

●医学研究科
●保健医療学研究科

医学研究科と保健医療学研究科を設置し、より高度で専門的な業務に必要な研究能力・豊かな学識を養成

専攻科

●公衆衛生看護学専攻
●助産学専攻

公衆衛生看護学専攻と助産学専攻を有する全国初の大学専攻科で、1年間で国家試験受験資格取得を目指す教育課程

医学部・保健医療学部合同の地域医療教育（多職種連携教育）

北海道の地域医療の充実と貢献を果たすため、本学では、地域志向性と使命感を持つ人材の育成に努めています。

学部横断科目である「地域医療合同セミナー」では、学生自身の実体験に基づいた地域医療に対する理解（地域医療マインド）と、地域医療に欠かせないチーム連携能力を身に付けるため、医学部・保健医療学部の学生が合同で演習や地域滞在型の実習を行います。地域医療に従事する使命感を育てる第1～第4学年までおよそ3年半の積み上げ式の教育です。

●地域医療合同セミナーの実施

第1学年　**地域医療合同セミナー1**
地域医療に関する合同演習、チームワーク醸成のための基礎演習、オンライン地域実習、第2学年・第3学年の地域滞在型実習への同行

第2学年　**地域医療合同セミナー2**
【メディカル・カフェ、健康教育セミナー】　別海、留萌、稚内、利尻

第3学年　**地域医療合同セミナー3**
【地域密着型チーム医療実習】　釧路、別海、中標津、留萌

第4学年　**地域医療合同セミナー4**
住民を対象に成果報告

●：医学概論・医療総論3実習予定地域　全19カ所
道南地区：函館市内2カ所、松前町、木古内町
胆振地区：むかわ町
日高地区：日高町、新ひだか町（静内、三石）、浦河町
空知地区：赤平市、芦別市、美唄市、三笠市、長沼町、栗山町
十勝地方：清水町、鹿追町、足寄町、本別町

時代や社会の動向に応える新講座を開設

感染症医療教育・支援センター
Infectious Disease Medical Education & Support Center（IDMEC）

感染症医療教育・支援センター長
髙橋 聡

IDMEC（アイディーメック）は、コロナ禍で注目された感染症診療・感染対策に精通した医療従事者を教育・支援する活動の中心となるべく2022年10月1日に附属病院内に設置され、2025年4月1日に本学附属のセンターとなりました。活動内容は、感染症関連資格取得支援（専門医等）、感染対策研修、感染症関連情報提供等です。資格取得支援については、感染症専門医取得に向けた支援に加えて、2026年4月よりB課程認定看護師教育機関（感染管理）として認定看護師（感染管理・B課程）の育成も開始します。感染対策研修としては、2023年度の14市町村に引き続き、2024年度も根室市・名寄市・苫小牧市・網走市・滝川市で個人防護具着脱などの研修を実施しました。情報提供としては、ワクチン外来開設、黄熱ワクチン対応、ダニ媒介性脳炎予防ワクチンなどに結びつく感染関連セミナーを開催し、加えて感染症領域を広く網羅するWEBセミナーも開催してきました。また、長崎大学病院感染症医療人育成センターからの研修も受け入れてきました。

本学は、多数の感染症専門医・認定医、感染管理認定看護師が活躍する大学として、今後も本センターを中心として診療科・講座・部門横断的な活動を発展させ、道内外の感染症診療・感染対策に貢献していきます。

新たな時代へ ― スポーツ医学講座

医学部スポーツ医学講座
教授
渡邉 耕太

スポーツ医学講座が2023年12月に新設されました。国公立大学医学部では初で、まさに本学の“進取の精神”が体現されました。この新設には医学教育モデル・コア・カリキュラム改定（2022年）や社会的要請、本学の実績が踏まえられています。スポーツ医学では、カリキュラムで新たに要求された資質である「総合的に患者・生活者をみる姿勢」が重要です。スポーツパフォーマンス向上や健康増進のために運動を手段として用い、対象の社会背景や希望、運動に影響する種々の因子（身体機能、疾病、メンタル、栄養など）を考慮して運動を処方する必要があります。

着任は2025年2月1日、診療は4月からです。創基80周年という区切りの年に活動を開始できます。スタートにあたり、ユニフォームを準備しました。これは、同期である40期の皆様にお祝いとしていただいたものです。身体的・精神的・社会的に良好な状態を指すウェルビーイングが注目される現在、スポーツ医学を“総合医学”としてとらえ医学生を教育します。スポーツ選手のハイパフォーマンスはもとより、広く一般人や疾病のある方々の運動を手段としたライフパフォーマンスの向上に取り組みたく存じます。

スポーツ医学講座ユニフォーム

卒前から卒後まで地域に密着し、連結したキャリア支援

医療の高度化・複雑化により、医療人が修得すべき知識・技能が増加。さらに、高齢化・疾病構造の変化等に伴い、患者さんや他の医療者とのコミュニケーション等を含むプロフェッショナリズム教育の重要性が増しているため、卒前・卒後の医療人養成は医療現場を中心に一貫して行うことが必要とされています。本学では医学部・保健医療学部それぞれにおいて病院実習から国家試験、卒後のキャリア支援形成を連結するための様々なプログラムを備えています。

医学部　必修実習／選択実習／地域包括型診療参加臨床実習
保健医療学部　病院実習／OSCE等演習
入学 …… 卒業
国家試験
- 卒後キャリア形成プログラム
- 臨床研修・医師キャリア支援センター
- 看護キャリア支援センター
- 理学療法士・作業療法士研修センター

世界をリードする研究と共創で医療課題の解決に挑む

実施許諾中の特許件数の割合が3年連続で全国1位を獲得

本学は全国の医学部では唯一、「知財担当教室」を設置し、医学生・研究者への知財リテラシーの普及・啓発や、医療系アカデミア・地域における知財人材育成を行っています。また、「附属研究連携推進機構」の実務を専門的にサポートすることで医療研究成果の社会実装を推進しています。

教育においては、学部学生に対して知的財産権の意義と重要性を伝えるとともに、大学院生に対しては研究者にとって最低限必要な知財リテラシーを培うための講義を実施。さらに、教員を含む研究者全体に対する啓発として、知財の活用や研究開発、研究成果の社会実装を手がける様々な人材を招聘し、特別講義も実施しています。

また本学では、弁理士資格を有し、知財・開発に精通するとともに医学研究を熟知する教員が、研究戦略相談、特許取得、開発研究の推進などに関するトータルサポートを行い、研究成果の戦略的な実用化を進めてきました。

2025年2月に文部科学省が公表した「大学等における産学連携等実施状況について　令和5年度実績」において、本学の知的財産関係の実績は全国トップクラスで、中でも「特許権保有件数のうち実施許諾中の特許件数の割合」は、全国の名だたる大学の中で、3年連続1位となりました。この「実施許諾中の特許件数割合」は、大学内の研究成果がいかに理想的に知財化されているかを示す指標といえ、本学で生み出された有用な研究が特許等を介して適切に実用化に結び付きつつあることが数字の上で示されました。

●2025年公表 知的財産関係数値ランキング

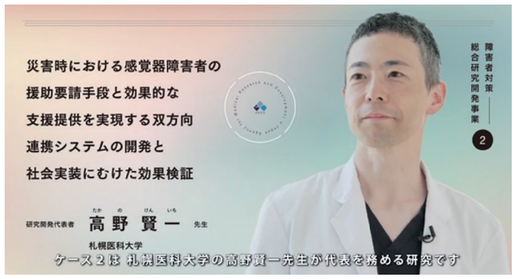
文部科学省「大学等における産学連携等実施状況について 令和5年度実績」より

「AMED事業におけるSDGs推進」動画で高野教授らの研究を紹介

国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED／エイメド）は、日本が進める健康・医療戦略のもとで医療分野の研究開発を担う中核的機関です。AMEDは、SDGsに掲げられる「すべての人に健康と福祉を」の達成に向けて障害者対策総合研究開発事業を推進していますが、その代表的な取り組みとして、本学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座の高野賢一教授が代表を務める研究が紹介されました。

災害時の避難所では、聴覚障がいのある方は孤独を感じたり、周囲に気を使いすぎて避難を躊躇したりすることがあります。そこで高野教授らは、誰一人として取り残されることのないよう、聴覚障がい者のニーズに対応した双方向の情報伝達システム「絆システム」を開発しました。

「絆システム」は被災者のスマートフォンや避難所のタブレット端末などからアクセスが可能であり、支援者側の負担軽減にもつながることが期待されています。既に病院などで実際に使用されている遠隔医療システムを基盤とし、シンプルで複数の機能を一元化するように改良されており、手話通訳や視覚情報を介して、情報収集や支援要請を容易に行うことができます。2030年までに、脆弱な状況にある人々の強靭性（レジリエンス）を構築し、災害における暴露や脆弱性を軽減する取り組みの一環として、「絆システム」は高い評価を受けています。



世界初となる脊髄損傷の再生医療を実践、脳梗塞治療にも期待

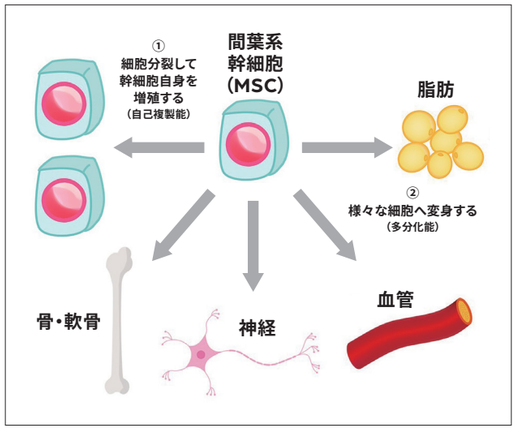
脳梗塞や脊髄損傷のように中枢神経が損傷を受ける疾患の後遺症や、筋萎縮性側索硬化症のように中枢神経が徐々に変性する疾患には根本的な治療法が存在しないといわれてきました。そうした中、本学では1990年から脳梗塞・脊髄損傷・認知症等の中枢神経疾患に対する再生医療の基礎研究を進める過程で、骨髄に含まれる間葉系幹細胞（MSC）を点滴投与すると良好な治療効果が得られることを発見しました。MSCはヒトの骨髄中に1,000個に1個の割合で存在し、神経細胞、骨・軟骨の細胞、血管の細胞、脂肪の細胞などに変化できることが明らかとなっています。

本学は1997年から脳梗塞患者に対して自己血清を用いて培養した自家骨髄間葉系幹細胞の経静脈的投与の臨床研究を行い、その治療効果と安全性を検証してきました。現在は、脳梗塞に対するMSC細胞治療を保険診療として多くの人が受けられるよう医師主導治験を継続中です。

また、2013年11月からは、ニプロ株式会社と医薬品（再生医療等製品）としての実用化に向けて、脊髄損傷に対する医師主導治験を実施。2018年12月には、厚生労働省から条件・期限付きで製造・販売が承認され、2019年5月から本学において受傷直後の脊髄損傷に対するMSC細胞治療の保険診療を開始しました。本治療は、受傷後31日以内に患者さん本人の腰の骨（腸骨）から骨髄液を採取し、細胞を分離・培養して製造した再生医療等製品「ステミラック®注」を点滴で投与。細胞を投与した後はリハビリテーションを行い、機能の改善を図ります。

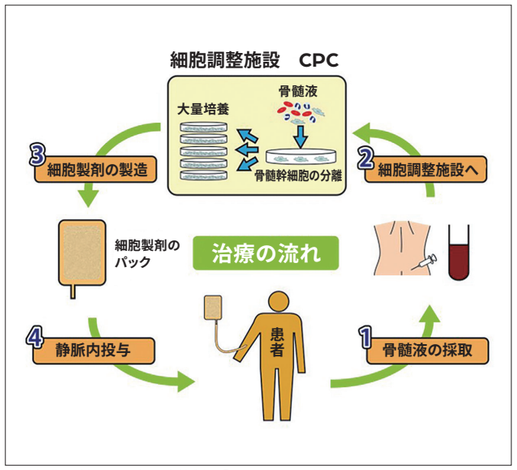
今まさに始まったばかりの脊髄再生医療ですが、今後、世界中の患者さんが負担なくこの治療を受けられるよう、日々研究が続けられています。また、受傷から6カ月以上が経過した慢性期の患者さんに対しても効果的な治療を行えるよう、引き続き治療法の開発を進めていきます。

医学部附属研究所
附属再生医学研究所
神経再生医療学部門
教授
本望 修



MSCの機能モデル。幹細胞は①自己複製能、②多分化能をもっている

再生治療後のリハビリテーションの様子



脊髄損傷に対する再生医療等製品「ステミラック®注」を用いた治療の流れ

DXと先端技術、確かな経験と実績で医療を推進

患者さんと病院をつなぐ国内初の健康管理アプリ「ポータブルカルテ™」

本学では、スマートフォンを用いて個人の健康状態を管理できるアプリ「ポータブルカルテ™」を富士通株式会社と共同開発し、全国初の健康データポータビリティ事業を推進しています。患者さんは本アプリを通じ、診療データ（EHR：Electronic Health Records）や健康データ（PHR：Personal Health Records）を活用し、診療情報や検査結果などをスマートフォンで簡単に確認でき、自身の健康や医療に関するデータを主体的に管理することが可能となります。

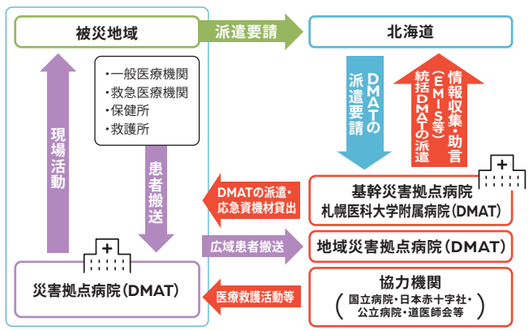
近年、政府や各省庁では医療機関が保有するEHRやウェアラブル端末などに蓄積されるPHRの活用が推進されています。本学はこの点に着目し、健康データポータビリティの実現に向けた仕組みを構築しました。診療情報をWebAPI技術で扱いやすい国際規格HL7 FHIRに準拠した統合データベースをクラウド上に構築し、2023年9月より「ポータブルカルテ™」の運用を行っています。

北海道のように広い地域では医療機関間のEHR共有が求められますが、現状は口頭説明や紙の診療情報提供書に依存するケースが多くみられます。本事業によりデータ共有を促進し、地域医療の質向上を図るとともに、患者さんにとって安全・安心な医療を実現します。今後は先進的な地域医療連携の構築を目指すとともに、蓄積されたデータの利用を推進し、個別化医療や未然医療の実現に向けた人工知能の開発や疾患別アプリの構築を進め、医学研究の発展に貢献します。

北海道唯一の「基幹災害拠点病院」としてリーダーシップを発揮

札幌医科大学附属病院（以下、本院）は北海道唯一の基幹災害拠点病院として、災害時の医療支援の中核を担っています。これまで東日本大震災（2011年）、能登半島地震（2024年）などにDMAT（Disaster Medical Assistance Team）をはじめ災害医療チームを派遣、診療や医療調整を行ってきました。北海道胆振東部地震（2018年）では道庁に設置された北海道DMAT調整本部にて道内外から応援に来たDMATを指揮し、全道の被災医療機関を支援。本院内では札幌医療圏の病院機能の維持やブラックアウトにより生命に危険があった患者さんの搬送を多数実施しました。

本院は災害時における医療提供の継続と医療資源の適正配分を担い、迅速かつ効果的な対応を実現するため、道内外の関係機関と緊密に連携しています。また、災害時に即応できる人材育成、災害医療の体制強化に向けたシミュレーション訓練、自治体との協力体制構築にも注力し、今後も地域と全国の災害医療の発展に貢献します。



災害医療連携体制

予後を改善する「がんゲノム医療」

内科学講座　腫瘍内科学分野
教授
高田 弘一

がん細胞の遺伝子変異を網羅的に検出するがん遺伝子パネル（CGP）検査が2019年6月に保険適用となり、がんゲノム医療の臨床実装が加速しています。がんゲノム医療とは、がん細胞のゲノム情報から治療薬を選択して治療成績を向上させる医療で、遺伝子変異に基づいた個別化がん治療です。本院では、腫瘍内科・遺伝子診療科・がんゲノム医科学・病理診断科と協働し、2020年1月より保険診療下でのCGP検査を開始しました。

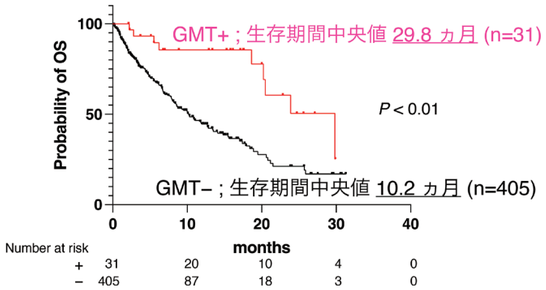
現在本院のCGP検査は年間200例を超え、その実績が高く評価され、2023年4月に厚生労働省よりがんゲノム医療拠点病院に指定されました。さらに函館五稜郭病院、王子総合病院、市立釧路総合病院と連携し、地域にがんゲノム医療提供体制を構築しています。

特筆すべき点は、CGP検査の結果、遺伝子変異に基づいた治療を施行した患者さんの予後が有意に改善することです。本院ではCGP検査を患者さんの予後改善可能な診療ツールと位置づけ、適切なタイミングでCGP検査を提案しています。がん診療フローはゲノム医療で一変しました。

本学からがんゲノム医療の有用性・エビデンスを国内外に発信し、地域への普及を目指して努力を継続します。

●本院でがん遺伝子パネル検査を施行した436例の解析結果

ゲノム情報に基づいた個別化治療は予後を改善する



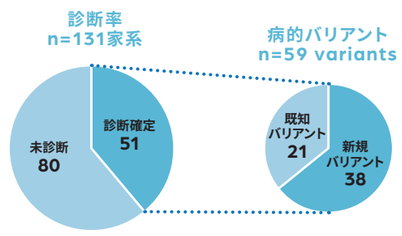
診断がつくまで、そして診断がついたあとの未来を支える「難病ゲノム医療」

「未診断疾患イニシアチブ（Initiative on Rare and Undiagnosed Diseases: IRUD）」は複数の臓器に症状がある、または遺伝性が疑われるものの診断がついていない患者さんに対し、網羅的遺伝子解析を行い診断の手がかりを見つけるプロジェクトです。2015年から2024年までに国内で9,046家系が登録され、診断率は約40%となっています。

本院は2016年からIRUDの拠点病院として参加し、2024年9月末までに171家系（459検体）を登録、診断率は38.9%です。2024年3月に難病のゲノム医療専門職養成研修を修了し、全エクソーム・全ゲノム解析を自施設で実施できる体制を整えており、2024年6月に保険収載された「複数の指定難病に係わる遺伝学的検査」を出検可能な要件を満たしています。患者さんの症状と照らし合わせた上で、遺伝学的検査の結果を正しく解釈し、患者さんやご家族に分かりやすく説明するとともに、適切な遺伝カウンセリングを行っています。

今後も患者さんとご家族の診断がつくまでの道のり、診断がついたあとの未来を支える最適なゲノム医療を提供できるよう、設備面・人材面の充実を進めます。また、遺伝子解析の進歩により一人でも多くの方が正しい診断を得て、適切な医療につながる未来を目指します。

●本院のIRUD実績　IRUD研究開始2016年度～2024年9月30日
171家系（459検体）のうち結果返却131家系



診断率 38.9%

・原因となるバリアントが同定された51家系のうち、1家系は二重診断であり、計52遺伝子52疾患であった。
・52疾患の中には、指定難病23疾患、小児慢性特定疾病23疾患が含まれていた。

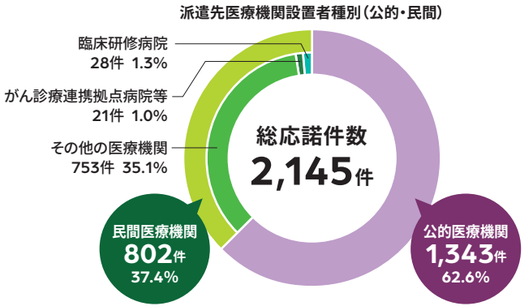
命を守り、地域を支える──医師派遣がつなぐ北海道医療

年間2,000件以上の医師派遣を実施

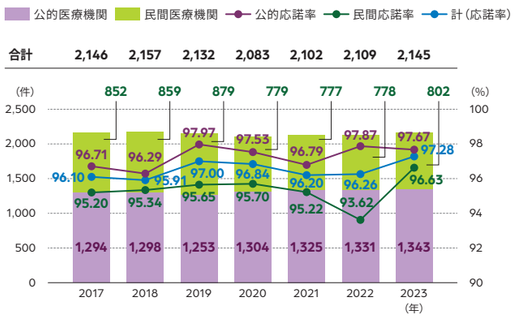
本学は北海道の地域医療提供体制の確保に向けて積極的な役割を果たすため、北海道や関係医療機関等との連携を強め、地域の医療機関等への医師の派遣を行っています。

2009年度からは、地域医療機関からの医師派遣要請に円滑に対応するとともに、本学の建学の精神である「地域医療への貢献」に資することを目的として、「札幌医科大学地域医療支援センター」を設置しています。2023年度は458医療機関から2,205件の要請があり、派遣実績は455医療機関の2,145件（応諾率97.3%）となりました。

●2023年度 医師派遣要請対応状況（派遣可:派遣先医療機関設置者別内訳）



●派遣件数（公的医療機関への派遣）**の推移**



民間企業と連携し、健康意識の向上を目指す

北海道民への疾病予防、健康意識の向上のため、民間企業と連携協定を締結し、公開講座の開催やメディアを活用した情報発信など様々な活動を展開しています。2024年は北海道テレビ放送株式会社（HTB）と「人生100年時代」をテーマに「ロコモ予防と骨の健康」についてトークセミナーを開催しました。現在は、民間企業10社と道内各地域において、健康向上のための多様な取り組みを実施しています。

2024年9月20日にHTBと開催した人生100年時代の健康トーク「ロコモ予防と骨の健康」

セミナーはYouTube HTB医TV公式チャンネルで視聴できます
https://www.youtube.com/watch?v=JuK3U7_Tt00

●連携協定企業との主な活動

北海道テレビ放送株式会社（HTB）
- 健康トークセミナーの開催
- 「医TV」地上波放送、YouTube配信

株式会社十勝毎日新聞社
- 十勝地方での「かちまい・札幌医大医療セミナー」開催
- 紙面企画「札医大の研究室から」掲載

株式会社北海道新聞社
- 「最後のとりでは眠らない　コロナ最前線で戦い続ける医師たち　札幌医大病院高度救命救急センター　アフターストーリー」企画掲載

株式会社ホリ
- こころとからだにやさしい道産農作物を使用したお菓子の共同開発開発実績「しそハスカップゼリー、しそハスカップグミ」「プラスショコラ」

北海道コカ・コーラボトリング株式会社
- 「こころとからだ うるおいアカデミー」開催

株式会社北洋銀行
- 「医の力〜札幌医科大学最前線〜道民医療講座」開催

大地みらい信用金庫
- 「移動医科大学」開催

留萌信用金庫
- 「メディカル・カフェ」開催

稚内信用金庫
- 「メディカル・カフェ」開催

北海道中央バス株式会社
- 「健康管理講演会」開催

国際交流を軸に世界的課題に貢献する大学へ

世界とつながる医療者教育と持続可能な国際貢献

本学は、国際的かつ先進的な医療の推進及びグローバルな視野を持つ人材を育成するため、海外の大学や研究機関との連携を深め、国際交流の拡大・活性化に向けた取り組みを推進しています。単なる学術協定にとどまらず、共同研究、短期留学プログラム、国際交流に関する報告会を開催するなど、多様な活動を通して、北海道はもとより、世界の人々の健康と福祉の向上に貢献しています。

本学では、学生がアルバータ大学での語学研修や、カリフォルニア大学サンフランシスコ校をはじめとする協定校での臨床実習に参加することで国際的な医療経験を積み、グローバルな視野を持つ医療人材の育成を目指しています。

また、国際貢献活動の一環として、独立行政法人国際協力機構（JICA）の委託を受け、中南米の日系研修員の受け入れを推進しています。コロナ禍で国際交流が難しい時期にあっても、2019年に韓国・高麗大学、2020年に米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校と交流協定を締結するなど、積極的に事業を展開しました。2024年には、研究者の国際医学交流事業を本格的に再開し、フィンランド・ヘルシンキ大学、米国マサチューセッツ州立大学、中国・佳木斯大学、韓国・高麗大学へ研究者を派遣しています。さらに、2025年にはパラオ共和国からの研修受け入れや、台湾・中国医薬大学と交流協定を締結するなど、事業の拡大を推し進めています。

ヘルシンキ大学（フィンランド）

左／外科学講座　心臓血管外科学分野　三浦修平助教（当時）
右／ヘルシンキ大学での心臓血管外科手術研修の様子

高麗大学（韓国）

左／薬理学講座・久野篤史教授（写真左）、医学部4年・中島龍汰さん（写真中央・当時）とYoung-Mee Lee教授（高麗大学：写真右）
右／中島さんが参加した高麗大学国際医学生研究発表会の様子

パラオ共和国との連携が始動

2024年7月にパラオ共和国のスランゲル・ウィップス・ジュニア大統領が来日した際、山下理事長・学長と会談を行いました。会談では研修受け入れや医療支援などの可能性について話し合われ、2025年3月1日から3カ月間、パラオ共和国の医師1名を臨床修練医として受け入れました。

パラオ共和国のスランゲル・ウィップス・ジュニア大統領（写真左）

パラオ共和国から研修のため訪日したアルラン・ジェイソン・カレイ医師（写真左）

●本学との交流協定団体・大学 ※括弧内は協定締結年度

【フィンランド】　パウロ財団（ヘルシンキ大学・トゥルク大学・オウル大学・タンペレ大学・東フィンランド大学、1977）
【カナダ】　アルバータ大学（1983）
【中国】　中国医科大学（1984）、佳木斯大学（2008）
【米国】　マサチューセッツ州立大学（1994）、カリフォルニア大学サンフランシスコ校（2020）
【韓国】　韓国カトリック大学（2011）、高麗大学（2019）
【台湾】　中国医薬大学（2025）

北海道各地で活躍する卒業生たち

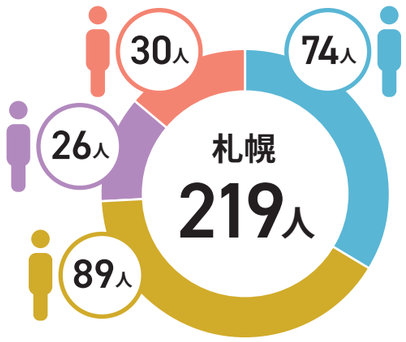
多様化するニーズに応える医療専門職を輩出

本学の卒業生は、地域の医療・福祉の発展に貢献すべく、北海道各地で臨床実践のスペシャリストとして、または医療分野をリードする存在として重要な役割を担っています。

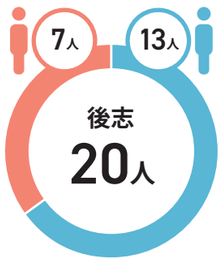
本学で培った知識と技術、そして生涯にわたって学び続ける姿勢は、道内の基幹病院や施設からの高い評価と信頼の獲得につながり、様々な分野において専門職としての確かなキャリアを形成しています。

過去3年間の卒業生地域別合計人数

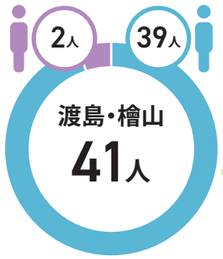
2022〜2024年度卒業生データ



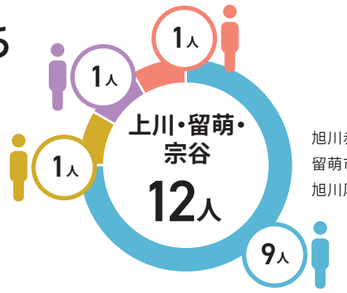
札幌医科大学附属病院
手稲渓仁会病院
天使病院
北海道医療センター
KKR札幌医療センター
札幌禎心会病院
市立札幌病院
JR札幌病院　など



済生会小樽病院
小樽市立病院
倶知安厚生病院
みどりの里　など

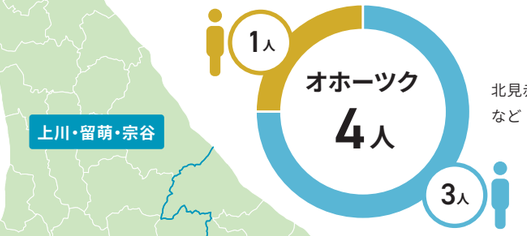


函館五稜郭病院
市立函館病院
函館中央病院　など

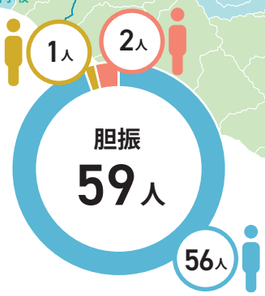


旭川赤十字病院
留萌市立病院
旭川厚生病院　など

岩見沢市立総合病院
江別市立病院
砂川市立病院
など



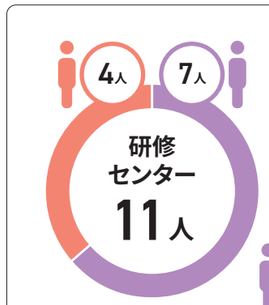
北見赤十字病院
など



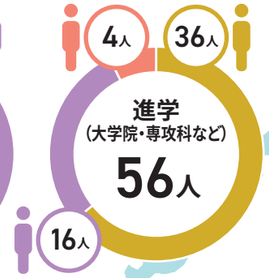
製鉄記念室蘭病院
王子総合病院
日鋼記念病院
市立室蘭総合病院　など

帯広協会病院
帯広厚生病院
十勝リハビリテーションセンター　など

釧路赤十字病院
市立釧路総合病院
釧路労災病院　など

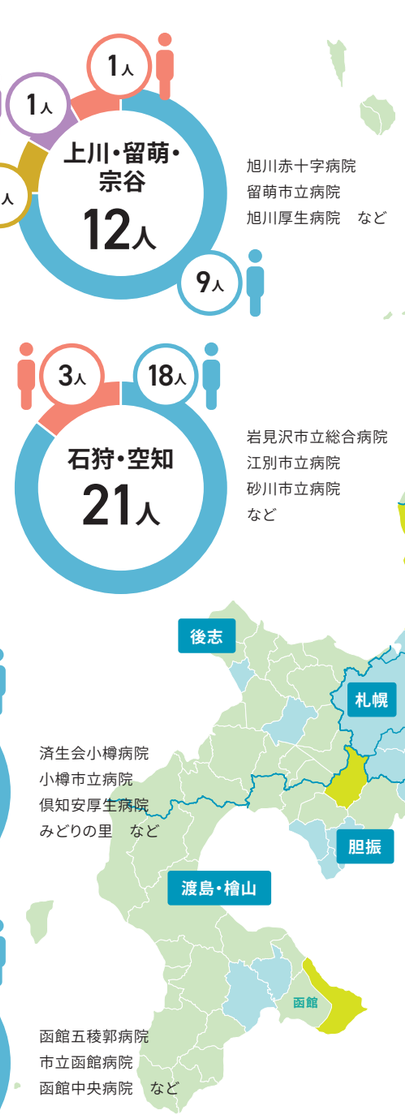


札幌医科大学附属病院
理学療法士・作業療法士研修センター



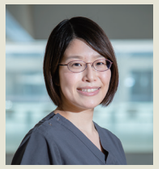
札幌医科大学大学院
保健医療学研究科
札幌医科大学専攻科助産学専攻
札幌医科大学専攻科
公衆衛生看護学専攻
札幌医科大学大学院医学研究科
筑波大学大学院　など

東京大学医学部附属病院
多摩済生病院
東京科学大学病院
東京慈恵会医科大学葛飾医療センター　など



医学部　看護学科 ※保健師を含む　理学療法学科　作業療法学科

OB／OGメッセージ



市立釧路総合病院
産婦人科
医長
梅本 美菜さん
（医学部医学科／第62期・2015年卒業）

私はこれまで道内各地で勤務してきましたが、産婦人科ではどの地域でも分娩や産科／婦人科手術、不妊症、ヘルスケアなど幅広い診療に関わっており、日々やりがいをもって働いています。また大学院生時代には臨床のみでは得ることのできない、研究や学会発表、論文への見識を広げることができました。研究から臨床に復帰した今は、腹腔鏡技術認定医の取得に向け、修練を重ねています。

社会福祉法人
栄和会法人本部
事業運営係長
森本 友香さん
（保健医療学部看護学科／第2期・1998年卒業）

病棟看護師を目指して入学したはずが、地域看護学実習で「自分は絶対に保健師が向いている！」と確信を抱いて保健師の道へ。25年間の行政保健師経験では、若いママの支援ツール開発で「健康寿命を延ばそう！アワード」の優良賞をいただいたことが良い思い出です。現在は「保健師が作るコミュニティカフェあるくっちゃ」を運営しており、笑顔あふれるカフェで、楽しく住民の健康づくりを支援しています。

札幌医科大学
保健医療学部理学療法学科
第二講座　講師
戸田 創さん
（保健医療学部理学療法学科／第12期・2008年卒業）

本学卒業後は大学野球やスキージャンプなどのトップアスリートに対してスポーツ理学療法サポートを実施してきました。2023年から「北海道スポーツ医・科学コンソーシアム」の運営に携わり、アスリートが道内のどの地域に住んでいても専門的な医科学支援を受けられる体制の構築に奔走しています。本学で培った探究心を胸に、道内スポーツ医科学の発展に貢献し続けたいと考えております。

社会医療法人北斗十勝
リハビリテーションセンター
リハビリテーション部　作業療法科
主任
迫 知輝さん
（保健医療学部作業療法学科／第20期・2016年卒業）

私は回復期と小児外来リハビリに携わっていますが、両領域とも一つの医療機関では完結できないと強く感じます。両領域とも「リハビリ以外の生活」「退院後の生活」の過ごし方がとても重要なため、他職種・福祉・行政との連携が非常に重要であり、そのような地域全体の連携が地域医療の特徴だと考えます。在学中に学んだ「他職種との連携」や「様々な地域での医療」の知識や経験は今でも生かされています。

数字で見る札幌医科大学

※特に記載のないものは2025年4月1日現在

累計卒業生数

医学部	保健医療学部		
医学科	看護学科	理学療法学科	作業療法学科
6,404人	1,491人	617人	603人

学生数

医学部	保健医療学部		
医学科	看護学科	理学療法学科	作業療法学科
661人	201人	80人	81人

大学院		専攻科	
医学研究科	保健医療学研究科	公衆衛生看護学専攻	助産学専攻
195人	68人	15人	15人

国家試験合格率（過去10年の結果（新卒者））

医師	看護師	理学療法士	作業療法士
94.9%	99.8%	98.5%	95.3%

専任教員数

378人

附属病院（2024年度）

札幌医科大学附属病院は32診療科、844床の施設を有する医療系大学附属の総合病院です

1日平均入院患者数	1日平均外来患者数	手術部手術件数
559人	1,540人	7,577件

運営・財務

Management
Finance

33 組織概要
34 ガバナンス／ハラスメント対策
35 財務情報
37 創基80周年記念事業／クラウドファンディング

建学の精神

一、進取の精神と自由闊達な気風
一、医学・医療の攻究と地域医療への貢献

理念

最高レベルの医科大学を目指します
■ 人間性豊かな医療人の育成に努めます
■ 道民の皆様に対する医療サービスの向上に邁進します
■ 国際的・先端的な研究を進めます

組織概要

役員等紹介
〈理事・副学長・監事〉

山下 敏彦
YAMASHITA
Toshihiko

理事長・学長

鈴木 一博
SUZUKI
Kazuhiro

副理事長

統括調整、総務、危機管理

齋藤 豪
SAITO
Tsuyoshi

理事・副学長・医学部長

教学マネジメント、研究推進、IR

片寄 正樹
KATAYOSE
Masaki

理事・副学長・保健医療学部長

DX推進、スポーツ医学、国際交流、地域保健

渡辺 敦
WATANABE
Atsushi

理事・副学長・附属病院長

附属病院、経営戦略（病院）、地域医療

本望 修
HONMOU
Osamu

副学長・附属研究連携推進機構長

石田 裕一
ISHIDA
Yuichi

理事

財務、経営戦略（法人統括）、広報

山﨑 博
YAMAZAKI
Hiroshi

監事（弁護士）

竹内 弘雄
TAKEUCHI
Hiroo

監事（公認会計士）

組織機構

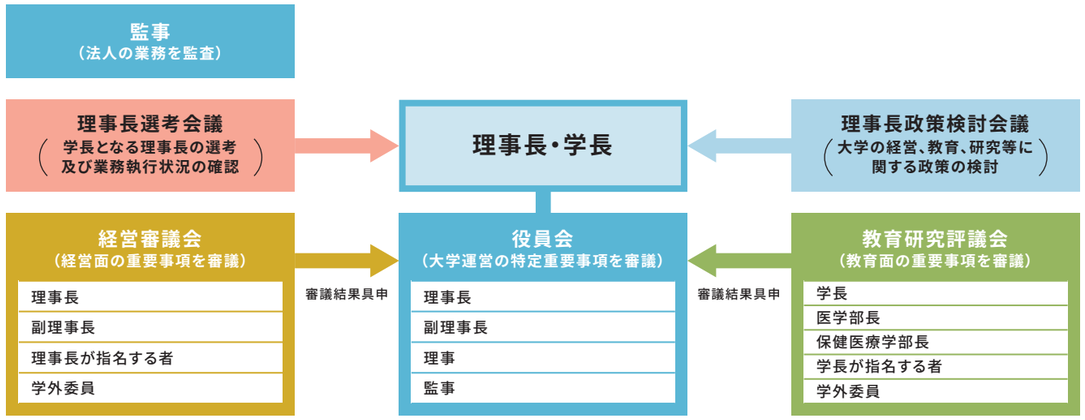
- 理事長（学長）
  - 役員会
  - 教育研究評議会
  - 経営審議会
  - 理事長選考会議
  - 監査室
- 医学部
  - 医学科　基礎医学部門　11講座　14分野／臨床医学部門　24講座　15分野
  - がん研究所（1部門）
  - 再生医学研究所（2部門）
  - 免疫学研究所（2部門）
  - 教育研究機器センター（8部門+1施設）
  - 動物実験施設部
  - カダバーセンター
- 保健医療学部
  - 看護学科（3講座）
  - 理学療法学科（2講座）
  - 作業療法学科（2講座）
- 医療人育成センター
  - 入試・高大連携部門
  - 教養教育研究部門（8学科目）
  - 教育開発研究部門
  - 応用情報科学部門
- 大学院
  - 医学研究科
  - 保健医療学研究科
- 専攻科
  - 公衆衛生看護学専攻
  - 助産学専攻
- 附属病院
  - 診療科（32科）
  - 中央診療部門等（24部門）

- 学生部
- 保健管理センター
- 国際交流部
- 地域医療研究教育センター
- 附属総合情報センター
- 附属研究連携推進機構
- 統合IRセンター
- 附属感染症医療教育・支援センター
- 寄附講座
- 特設講座
- 事務局
- 標本館

ガバナンス

経営・教育研究等に関わる本学の意思決定体制

●法人のしくみ



ハラスメント対策

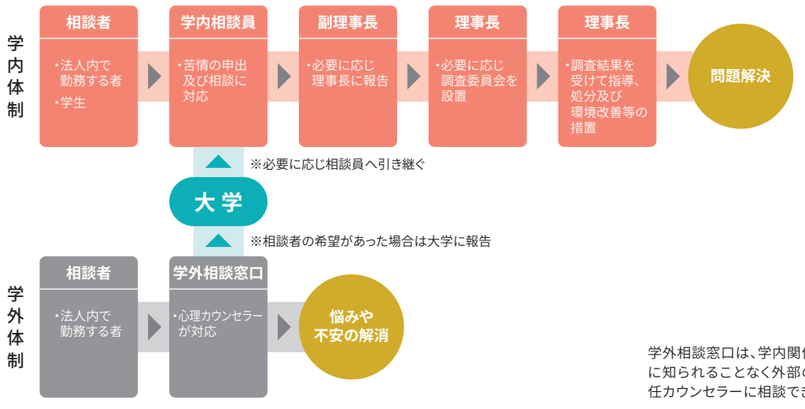
ハラスメントをしない・させない・許さない

あらゆるハラスメントは、人としての尊厳を傷つけるだけではなく、本学の職場環境、研究・教育環境を著しく損なうと同時に、本学の信用を失墜させます。本学では、これまでもハラスメント防止に関する研修会等を開催するとともに、相談窓口の設置など、ハラスメント発生時の対応体制の構築にも努めてまいりました。今後も、ハラスメント防止への教職員の意識向上や環境づくりに一層努めていく所存です。

（ハラスメント防止に向けた理事長メッセージより抜粋）

ハラスメント啓発カード

●ハラスメントに関する申出・相談の流れ



学外相談窓口は、学内関係者に知られることなく外部の専任カウンセラーに相談できる

令和5事業年度 財務情報
（2023）

貸借対照表

「貸借対照表」は、決算日（令和6年3月31日）における財務状況（資産・負債・純資産）を表したものです。

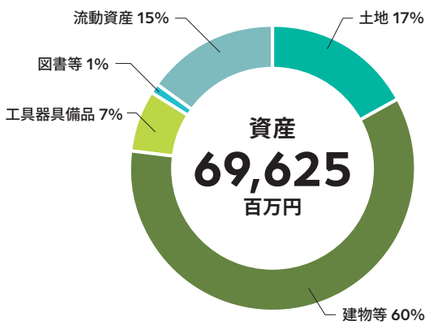
資産は前年度比53億3,200万円減少の696億2,500万円、負債は前年度比36億3,700万円減少の115億3,100万円、また純資産は前年度比16億9,500万円減少の580億9,400万円となっています。

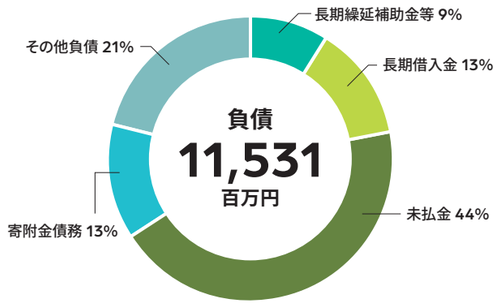
【令和6年3月31日】（単位：百万円）

区分	4年度	5年度	増減
資産の部	**74,957**	**69,625**	**▲ 5,332**
【固定資産】	**61,298**	**59,237**	**▲ 2,061**
土地	11,881	11,881	0
建物等	42,739	41,464	▲ 1,275
工具器具備品	5,699	4,971	▲ 728
図書等	786	757	▲ 29
その他固定資産	193	164	▲ 29
【流動資産】	**13,659**	**10,388**	**▲ 3,271**
現金・預金	5,280	4,053	▲ 1,227
未収病院収入	5,305	5,171	▲ 134
その他流動資産	3,074	1,164	▲ 1,910
資産合計	**74,957**	**69,625**	**▲ 5,332**

区分	4年度	5年度	増減
負債の部	**15,168**	**11,531**	**▲ 3,637**
資産見返負債	3,493	0	▲ 3,493
長期繰延補助金等	0	1,031	1,031
長期借入金	1,478	1,432	▲ 46
未払金	6,430	5,114	▲ 1,316
寄附金債務	1,314	1,519	205
その他負債	2,453	2,435	▲ 18
純資産の部	**59,789**	**58,094**	**▲ 1,695**
資本金	61,021	61,021	0
資本剰余金	▲ 7,585	▲ 8,545	▲ 960
利益剰余金	6,353	5,618	▲ 735
負債・純資産合計	**74,957**	**69,625**	**▲ 5,332**

注）各金額は単位未満を四捨五入しているため、計は一致しない場合があります。





〈主な増減要因〉

・資産の建物等について、設立団体から駐車場など構築物の譲与により増加した一方で、減価償却費により12億7,500万円減少しております。

・負債の資産見返負債について、地方独立行政法人会計基準の改訂により、資産見返負債の会計処理を廃止したことに伴い、34億9,300万円減少しております。

損益計算書

「損益計算書」は令和5年4月1日から令和6年3月31日までの運営状況（費用、収益）を表したもので、企業会計をもとに地方独立行政法人特有の会計処理を実施しております。

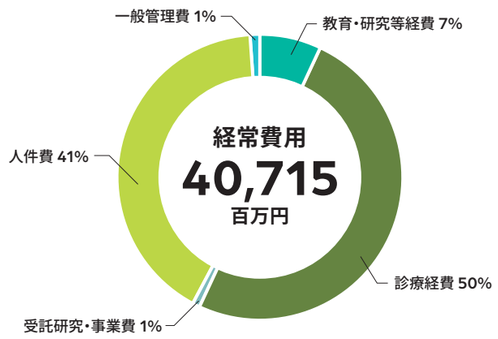
経常費用は14億1,100万円増の407億1,500万円、経常収益は11億2,500万円減の385億5,300万円です。この差額に臨時損益、目的積立金取崩を加えた当期総利益は前年度比2億9,400万円増の11億100万円です。

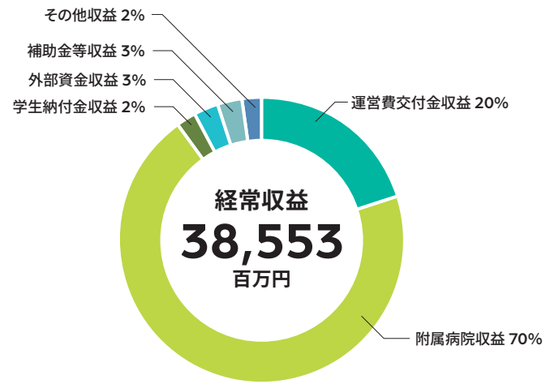
【令和5年4月1日～令和6年3月31日】（単位：百万円）

区分	4年度	5年度	増減
教育・研究等経費	2,341	2,703	362
診療経費	19,358	20,356	998
受託研究・事業費	417	484	67
人件費	16,535	16,589	54
一般管理費	653	583	▲ 70
経常費用	**39,304**	**40,715**	**1,411**
臨時損益	▲ 6	1,978	1,984
目的積立金取崩	439	1,285	846
当期総利益	**807**	**1,101**	**294**

区分	4年度	5年度	増減
運営費交付金収益	6,856	7,782	926
附属病院収益	26,356	27,060	704
学生納付金収益	801	807	6
外部資金収益	1,022	1,075	53
補助金等収益	3,280	1,103	▲ 2,177
その他収益	1,363	726	▲ 637
経常収益	**39,678**	**38,553**	**▲ 1,125**

注）各金額は単位未満を四捨五入しているため、計は一致しない場合があります。





〈主な増減要因〉

・診療経費について、高額医薬品の使用量の増加などによる増加や、医療機器の修繕費、保守費の増加などにより9億9,800万円増加しております。

・運営費交付金収益について、光熱費高騰や給与増改定分などを増額交付されたことにより9億2,600万円増加しております。

・補助金等収益の主な減少要因は、新型コロナウイルス感染症関連の補助金等が22億900万円減少したことによるものです。

・臨時損益の主な増加要因は、会計基準の改訂により、21億6,500万円の資産見返負債の収益化を行ったことで増加したものです。

節目の年に新しい一歩に向けて

創基80周年記念事業

本学は1945年に開校した北海道立女子医学専門学校を前身に、1950年に戦後初の新制医科大学として開学し、2025年に創基80周年（開学75周年）を迎えました。これまでの取り組みの一層の推進を図り、公立大学法人としてさらなる社会貢献を図るため、80周年を契機として改めて建学の精神に立ち戻り、「札幌医科大学 Vision for the Next Decade」を策定し、100周年に向けての歩みを進めています。また、本ビジョンに基づく取り組みを推進するため、記念事業（記念式典・講演会・祝賀会の開催、記念誌発行、記念映像の作成、記念番組の提供、施設整備など）を行うこととしました。本事業にご理解・ご賛同いただいた皆様より温かいご寄附を賜っています。

［寄附金募集要項 概要］

・事業名：札幌医科大学創基80周年（開学75周年）記念事業寄附金
・期間：2026年3月31日まで
・募金目標額：5千万円
・募集対象：（個人）一口につき1万円、（法人）一口につき10万円

募金使途：80周年記念事業に充当します。記念事業終了後に残余の額が生じた場合は、引き続き寄附金として管理し、ビジョンの実現に向けた事業など、ご寄附いただいた趣旨に沿って活用させていただきます。

■詳細は、記念事業のウェブサイトをご覧ください
https://web.sapmed.ac.jp/jp/section/contribution/annivesary80th.html

■お問い合わせ
札幌医科大学 事務局研究支援課（寄附金担当）
電話：011-611-2111（内線22280）
FAX：011-611-2185
Eメール：kihukin@sapmed.ac.jp

クラウドファンディングの取り組み

本学はクラウドファンディングサービスを運営するREADYFOR株式会社と業務提携を締結し、「札幌医科大学クラウドファンディング」を開始しました。2024年5月13日から第一弾として5件のプロジェクトを公開し、目標額を上回るご支援をいただきました。

国公立大学を取り巻く環境が大きく変わる中、様々な形での支援獲得が重要になっています。その有力な手段として、今後もクラウドファンディングを活用し、研究活動や大学の設備投資等に対する寄附金獲得の機会拡大につなげます。

札幌医科大学クラウドファンディング
https://readyfor.jp/pp/sapmed-u

自己免疫性神経疾患｜自己抗体測定による早期診断から治…
札幌医科大学医学部　神経内科学講座
#医療・福祉
129%
寄付総額 5,174,000円　寄付者 109人　終了日 10/31

事故に遭った子どもにこころのケアを！医療者に学びの機…
平川 賢史　（札幌医科大学小児科学講座）
#子ども・教育
101%
寄付総額 7,120,000円　寄付者 283人　終了日 6/30

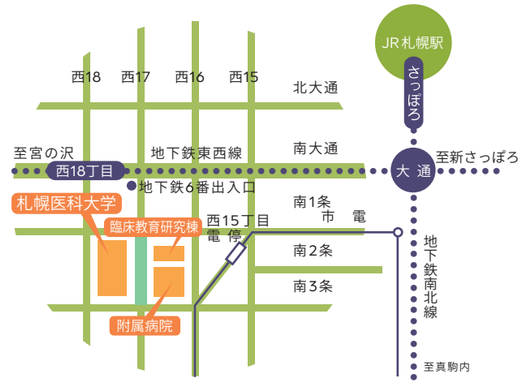
難治性の炎症性腸疾患　たび重なる外科手術の回避を目指…
永石歓和（札幌医科大学医学部 解剖学第二講座）
#医療・福祉
131%
寄付総額 9,221,000円　寄付者 196人　終了日 7/11

患者さんへの治療説明用動画を作成し、安心・安全な働き…
小山雅之
#医療・福祉
167%
寄付総額 5,865,000円　寄付者 147人　終了日 6/30

札幌医科大学｜外科手技トレーニング施設の環境整備へ…
大崎雄樹（札幌医科大学サージカルトレーニン…
#医療・福祉
138%
寄付総額 9,710,000円　寄付者 245人　終了日 7/11

本学へのアクセス

■所在地：札幌市中央区南1条西17丁目
■地下鉄東西線「西18丁目駅」下車、6番出入口から徒歩3分
■市電「西15丁目」停留場から徒歩5分



施設配置

1. 基礎医学研究棟
2. 大学管理棟
3. 教育研究棟
4. 保健医療学研究棟
5. 臨床教育研究棟
6. 札幌医科大学附属病院外来棟
7. 札幌医科大学附属病院中央診療棟
8. 札幌医科大学附属病院北病棟
9. 札幌医科大学附属病院南病棟
10. 札幌医科大学附属病院西病棟
11. 体育館・リハビリテーション教育実習棟
12. 保育所
13. 札幌医科大学記念ホール
14. 札幌医科大学交流会館
15. 細胞プロセッシング施設
16. 札幌医科大学附属病院ファミリーハウス
17. 広場「らてす」
18. 第1駐車場（有料駐車場）
19. 第2駐車場（有料駐車場）
20. 東駐車場（有料駐車場）

編集後記

創基80周年を迎え、本学初となる統合報告書を編む運びとなりました。地域に根差して築き上げた歩みを礎に、これからも北海道の未来を担う医療と学術の創造に挑み続けてまいります。本報告書は今後、さらに内容を充実させながら定期的に刊行を重ね、新たな知と力を育み、道民の皆様と共に希望に満ちた未来を切り拓いてまいります。

80周年記念タスクフォースリーダー　杉村 政樹

80周年記念タスクフォース

医療人育成センター教育開発研究部門	教　授	杉村政樹（リーダー）
保健医療学部	学部長	片寄正樹
医学部附属研究所免疫制御医学部門	教　授	一宮慎吾
医学部生理学講座	准教授	佐藤達也
医学部感染学講座	准教授	小笠原徳子
医学部社会医学講座	講　師	小山雅之
保健医療学部作業療法学科	准教授	中村充雄

長期ビジョン改訂ワーキンググループ

	理事長・学長	山下敏彦（座長）
医学部	学部長	齋藤　豪
保健医療学部	学部長	片寄正樹
医療人育成センター教育開発研究部門	教　授	杉村政樹
医学部医療安全・病院管理学講座	准教授	上村修二
保健医療学部看護学科	准教授	木島輝美
医学部社会医学講座	教　授	小林宣道
医学部総合診療医学講座	教　授	辻　喜久
医学部社会医学講座	講　師	小山雅之
医学部医療安全・病院管理学講座	講　師	西田幸代
保健医療学部理学療法学科	准教授	岩本えりか
保健医療学部作業療法学科	講　師	森元隆文

北海道公立大学法人 札幌医科大学

〒060-8556 札幌市中央区南1条西17丁目
電話：011-611-2111（代表）
FAX：011-611-2237
https://web.sapmed.ac.jp/

編集・発行　札幌医科大学事務局経営企画課
2025年6月発行

札幌医科大学

札幌医科大学
附属病院

札幌医科大学
公式YouTube
チャンネル

札幌医科大学
広報公式X

本報告書に関する
アンケートのご協力を
お願いいたします